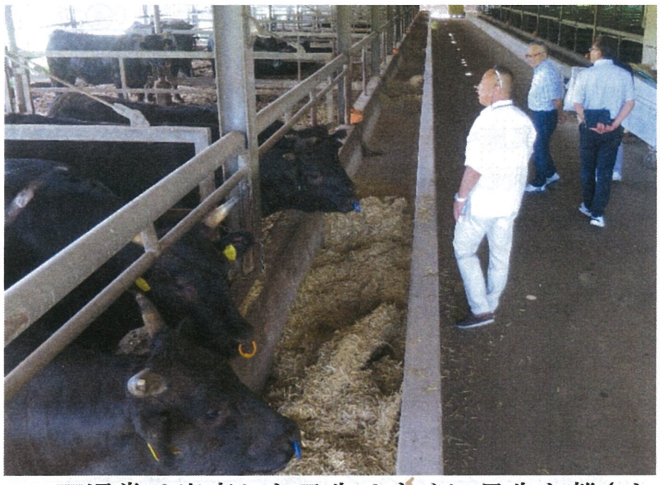
○　石垣牛流通協議会、現地の肉牛増頭計画を調査、着実な素牛導入状況を確認

石垣牛流通協議会（会長：植村光一郎・ニイチク監査役）は12日から14日まで、石垣牛の出荷増頭の進ちょくを確認するための現地調査を行った。調査は、八重山諸島の石垣島と黒島で行い、家畜市場や生産者を訪問、現地では肉牛増頭計画に基づき着実な子牛導入が行われていることを確認した。

八重山地区は地理的には南に位置するが、海風を受け気温は穏やかで、ミネラルを多く含んだ良質な牧草を安定して確保することができる（年5回以上収穫が可能）。現地の子牛はその潤沢な牧草を与えられ丈夫で健康に育てられている。石垣牛をめぐっては、石垣牛流通協議会が昨年度から年間1千頭の出荷目標を掲げてきた。しかし、現地では島内を訪れる観光客やインバウンド需要を見越した生産が行われていたため、肥育牛の増頭が進まず、内地の需要に対して協議会では顧客に販売を待ってもらうことを余儀なくされていた。こうしたなか、協議会の総会で石垣牛肥育部会から増頭の確約が提案された。これを受けて現地の出荷増頭計画の進ちょく状況を確認するために調査を行ったもの。調査には植村会長や笹英典副会長（エムアイフードサービス執行役員）ら5人が参加し（＝**写真㊥**）、黒島家畜市場、八重山家畜市場のほか、繁殖および肥育農家6カ所を訪問した。

植村会長によると、訪問時、黒島家畜市場では145頭、八重山家畜市場では379頭が上場され、活況を呈していたという。これら市場で取引される子牛は、全国の有名産地で購買され、各地の銘柄牛の肥育素牛になる。だが、繁殖農家によると、島内での肥育が活発に行われるようになったことで、生産した子牛の評価が明確になるとして期待感が高まっているという。そして、島内の肥育農家も増頭計画に基づき着実に素牛の導入を進めていたという。

また生産者訪問のうち、子牛の生産事業では▽6～10カ月齢をめどに市場に出荷している▽繁殖牛は粗飼料を多給し、脂肪を乗せない（脂肪が乗り過ぎると妊娠し難くなるため）



▽通常は出産した子牛はすぐに母牛と離されてしまうが、八重山では出子牛を1カ月ほど親牛と一緒に育てている（初乳を十分与えられ、親の愛情で健康に育つことを期待）――ことなど、現地の取組みを確認した。肥育事業では、各ステージの肥育状況を確認した。石垣牛の出荷時の定義として去勢は24～35カ月齢、雌は24～40カ月齢という。

現地を訪問して植村会長は、「牛舎の問題や食肉処理能力の問題は未だ散在しているものの、生産現場の活気は確認できた。今回の取組みが順調に遂行されれば、年間出荷700頭が1千頭まで増頭されることになる。石垣牛のブランディングをするうえで潤沢な供給量は必要不可欠だ」と述べている。

このほか、現地では生産者や中山義隆石垣市長らと意見交換も行った。中山市長は「（島内肥育の活性化により）子牛という経営資源の島外への流失が少しでも緩和されることは喜ばしいこと」と述べ、肉牛増頭計画への期待感を示した。そのうえで、石垣牛だけでなく今後は石垣の農水産物を含めた石垣島フェアも行ってもらいたいとの意向も示した。

植村会長は、「今回の調査を受け、石垣牛のおいしさだけでなく、育った環境や農家のこだわり、健康に育った経緯を消費者、生活者に伝えることで、石垣牛のファンを増やしていきたい」と抱負を述べた。